

登校拒否中学・高校生に対する 冒険キャンプの効果

○飯田 稔（筑波大学）、石川 国広（東京工業大学）、遠藤 浩（筑波大学）、
坂本 昭裕（筑波大学研究生）

キーワード：登校拒否、中学・高校生、キャンプ、不安、自己概念

目 的

現在、登校拒否はますます増加、深刻化の傾向にあり、大きな社会問題になっている。文部省の学校基本調査の速報（1988）によれば、登校拒否児は過去最高となり、特に中学生では前年に比べ3000人以上も増加し、約32,700人にのぼることが明らかになった。私たちのグループは、1987年から登校拒否児に対する冒険キャンプの研究に取り組んでいるが、本研究では1988年に実施したキャンプ療法に基づいて、1) 登校状況、2) 不安、3) 自己概念、の変化を評価し、登校拒否児の問題解決に資することを目的とする。

方 法

キャンプの特色：1) 野外運動、精神医学、学校カウンセリングの大学教官およびその大学院生が共同して総合的指導にあたる。2) 一般的なキャンプ活動に加えて、自然の中での冒険やサバイバルに重点をおいたキャンプ・プログラムである。3) 健常児と登校拒否児が一緒にキャンプをする統合キャンプである。4) 大学構内での予備キャンプ（1泊2日）、宮城県花山キャンプ場での本キャンプ（8泊9日）、キャンプ後の報告会（1日）の他に、事前・事後の指導相談を含んだ長期的プログラムである。

被験者：1988年8月15日～23日に実施した幼少年キャンプ研究会主催の冒険キャンプに参加した登校拒否中学生6名（男子3名、女子3名）と高校生男子1名の計7名と、同年代の健常児18名（男子13名、女子5名）からなる。登校拒否児は新聞記事を読んで自主的に応募したもので、急性短期（1年以内）の登校拒否児である。

検査および手続き：1) 登校状況は母親に対する質問紙「登校状況報告」を作成し、キャンプ1ヶ月前、キャンプ3ヶ月後、10ヶ月後の3回実施した。2) 被験者の不安を測定するために、「状態＝特性不安目録」（清水、今栄、1977）を使い、状態不安については前記の3回のほかに、キャンプ直前、ソロ活動前、キャンプ直後の計6回行なった。また特性不安に関しては、キャンプ1ヶ月前、キャンプ直後、キャンプ3ヶ月後、10ヶ月後の4回実施した。3) 自己概念は「自己成長性検査」（梶田、1980）を用い、特性不安と同時に4回測定した。

統計処理：不安と自己概念の変化について、登校拒否群に対してはWilcoxon Matched-pairs Signed-ranks Test、登校拒否群と健常群の比較はMann-Whitney U Test、さらに健常群についてはt-Testにより検定した。

結果と考察

1) 登校状況： キャンプ終了後9月から学校復帰した者3名、12月1名、1月2名、4月1名であった。学校復帰後、再び不登校を繰り返した者もあり、キャンプ10ヶ月後

(6月)の学校復帰者は5名(71.4%)で、2名は不登校状態にある。この結果は1987年の学校復帰率(7名中5名)と一致している。

2) 状態不安: ソロ活動前で最も高い状態不安を、逆にキャンプ3ヶ月後に最も低い値を示し、有意差傾向($Z=-1.89, P<.06$)がみられたが、その他の比較においては有意差はなかった。また、健常群との比較では、すべての場面で登校拒否群の状態不安が高かったが有意に違えるものではなかった。一方、健常群だけについてみると、キャンプ1ヶ月前に比べソロ活動前に有意に状態不安が高かった($t=3.28, df=17, P<.01$)。従って、登校拒否群は、キャンプ1ヶ月前からキャンプ終了まで常に高い状態不安にあったことが推測される。

3) 特性不安: 登校拒否群の特性不安はキャンプ3ヶ月後には低下し、10ヶ月後には有意差傾向が認められた($Z=-1.77, P<.08$)。健常群と比較すると、すべての場面で登校拒否児の特性不安が高い。しかし、キャンプ1ヶ月前($U=27.0, P<.05$)、キャンプ直後($U=15.0, P<.01$)、3ヶ月後($U=28.5, P<.05$)においては登校拒否群が有意に高かったが、10ヶ月後には両群の間には有意差はみられなかった。健常群については、キャンプ3ヶ月後($t=2.42, df=17, P<.05$)、10ヶ月後($t=1.82, df=17, P<.09$)に各々有意および有意差傾向の特性不安の低下が認められた。

登校拒否児の一般的性格特性として、神経質で不安傾向が高いといわれているが、キャンプ経験は、登校拒否児の不安傾向を減少させる効果があることを示唆している。

4) 自己概念: 登校拒否群の自己概念は、キャンプ10ヶ月後に向上し、キャンプ直後との比較において有意差傾向が認められた($Z=-1.86, P<.07$)。さらに4つの因子別に検定した結果、自信と自己受容の因子に有意差傾向がみられた($Z=-1.89, P<.06$)。健常群との比較では、キャンプ1ヶ月前($U=26.0, P<.05$)、キャンプ直後($U=20.5, P<.01$)、3ヶ月後($U=22.5, P<.05$)と登校拒否群の自己概念が有意に低かったが、10ヶ月後になると有意な差はみられなかった。健常群の自己概念は、キャンプ10ヶ月後に有意に向上した($t=2.16, df=17, P<.05$)。因子別では、他者のまなごしの意識に有意な向上が認められた($t=3.36, df=17, P<.01$)。

以上の結果から、冒険プログラムを中心にした一連のキャンプ療法は、登校拒否群に強いストレス体験を与え、それを克服することによって、性格特性としての不安傾向を改善するとともに、自信と自己受容を高めることにより自己概念の向上が計られたと考えられる。自己概念の向上は、日常生活における態度や行動に転移するとされるが、登校拒否児にとっては再登校という行動になって現れたものと推察される。

結 論

健常児との冒険キャンプ体験は、登校拒否児の不安を解消し、自己概念を高めるという人格変容の点で効果が認められ、登校状況の改善に寄与することが示唆された。今後、登校拒否児の被験者数を増すことによってキャンプ療法の効果について追求する必要がある。

※本研究は、第3回(昭和62年度)マツダ財団の研究助成を得て行われた。